

ポスト 3.11 の東北への旅：復興と再起の実態

ラム・ペンエ

2018 年 12 月、国際交流基金アジアセンターの温かい支援と協力により、10 日間の東北（福島県、宮城県、岩手県）へのフィールドトリップが実現しました。私には 2 つの目的があり、1 つ目は 2011 年 3 月に発生した、地震、津波、福島第一原子力発電所事故から成る三重の災害からの地域復興について学ぶこと、2 つ目は福島県相馬市、宮城県七ヶ浜町、岩手県陸前高田市の 3 地域に対するシンガポールの人道支援について把握することでした。

東北への旅は、私にとってまさに新たな視野が開けるような体験となりました。津波による破壊の規模、深刻さ、そして悲劇には、本当に衝撃を受け圧倒されました。しかし、復興に向けたねばり強い着実な歩みの中に、希望の兆しが見えました。地域再建は、少なくとも 3 つの面で構成されます。道路、橋、鉄道、将来の津波を軽減するための護岸、住宅、病院や学校等の物理的な再建、地域産業や商業の復興、そして地域コミュニティの再建です。

私の胸に強く刻まれたのは、3.11 の直後、地域コミュニティの再建に向けて東北の人々が見せたくじけることのない底力、そして比較的孤立していた地域が、日本、アジアそして世界の他の地域から訪れる人々を受け入れるオープンな地域へと変貌した様子でした。復興に向けた超人的な努力（インフラハードウェアとコミュニティが再び築き上げる「ハート（心）ウェア」の両方）は、間違いなく、日本人の再起力を反映したものだという印象を受けました。しかしこの膨大な作業は、被災地域の人々だけが背負うものではありませんでした。貧富を問わず世界中の国々が、東北の人的必要と復興のために惜しみない支援を寄せました。海外から届いた被災地を気遣う声、サポート、支援、励ましが次々と寄せられたことは、多くの日本人にとって驚きだったようです。恐ろしい悲劇が人間の絆を強めることもあるのです。

今回の東京と東北への旅では、前復興大臣をはじめ、岩手県および宮城県の県職員、岩手県立大学の研究者、復興庁本庁と岩手復興局の職員、その他相馬市、七ヶ浜町、陸前高田市の市長や町長、リアス・アーク美術館の学芸員、アーティスト（「三陸国際芸術祭」プロデューサー）、工場を全て失いながらも事業をゼロから再建した醤油商店の店主、陸前高田市に新たに移住した若者たちなど様々な方が、それぞれの 3.11 を率直に語ってくれました。こうした多方面の人々との会話で分かったのは、インフラや経済復興よりも、生活や社会的なつながりが離散してしまった地域コミュニティの再建のほうが困難であるということです。それでも人々は、膨大な作業にめげることなく、絶望ではなく希望を持って、より良いコミュニティ再建に向けて取り組んでいます。

しかし、東北が抱える長期的な問題や課題を響きの良い言葉でのごしておくわけにはいきません。次の4点は、私が現地を訪れて感じた主な課題です。第一に、年齢を問わず多くの住民が今もなお、恐ろしい爪痕を残した体験に心の傷を癒せずにあります。第二に、日本や世界の多くの地域が、定期的に自然災害に見舞われているということです。東北に寄せられていた関心が、地震、津波、台風、洪水、地すべり、火山噴火などの自然災害が次から次へと発生する日本国内の、またアジアと世界の他の地域へと徐々に移っていくのは避けられません。第三に、日本全土と同様に東北も急速な高齢化と人口減少という問題に直面しています。これらは地域経済、行政税収、社会福祉施設やサービスに深刻な影響を及ぼすことになるでしょう。だからこそ、こうした地域は、日本国内の他の地域から若い新規移住者を、さらには農業や漁業等の産業で働く海外労働者をも引きつけるような創造性をもって対応する必要があります。第四に、数十年かかる可能性もある、福島第一原発と近隣地域の除染です。今回のフィールドトリップでは、福島第一原発の1.5km圏内にまで足を運び、汚染された表土を除去する入念な作業を目にしました。

今回のリサーチトリップで最も記憶に残った3つの場面は何かと聞かれれば、それは、松島湾に点在する緑豊かな数百の島々から成る美しい絶景、陸前高田市のすてきな老夫婦のご家庭でのホームステイ（このご主人は、東北弁を私に教えてくれました）、そしてシンガポールの支援により建設された多目的コミュニティホールで、元気なお年寄りたちと踊ったことです。私が披露した陸前高田風にアレンジした文化的な踊りが、地元紙 岩手日報のカラー紙面で取り上げられたことも、うれしい驚きでした。

最後に、今回のリサーチを通して陸前高田市、宮古市、相馬市、七ヶ浜町の住民の方々とシンガポールとの間に特別な絆ができることを私は強く望みます。これらの地域は、シンガポール赤十字社を通して、シンガポールから災害・人道支援が送られた地域です。日本の東北地方の片隅にある地域と東南アジアの都市国家との間に、思いも寄らず突然友情が芽生えたこと、それこそが災害後の希望の光ではないでしょうか。災害と苦しみの中で生まれた友情が続き、3.11の教訓が忘れられないことを望みます。それらは、教訓としてまたインスピレーションとして、世界中で分かち合うべきであり、その必要があると私は思うのです。